【318】

氏　名（本籍）	三　輪　貴美枝（群 馬 県）（みわ きみえ）
学位の種類	博　　士（教 育 学）
学位記番号	博 乙 第 2133 号
学位授与年月日	平成 17 年 6 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	F.Ch. エーティンガー・人間形成論の研究 ～ 教育的関心の収束過程に注目して ～

主　査	筑波大学教授	博士（教育学）	山　内　芳　文
副　査	筑波大学教授	博士（教育学）	大　戸　安　弘
副　査	筑波大学教授	博士（教育学）	山　本　眞　一
副　査	筑波大学教授	博士（教育学）	大　高　　　泉

論 文 の 内 容 の 要 旨

（目的と課題）

本研究は，いくつかの画期において分断的に理解されてきたドイツにおける Bildung 概念の展開を連続的で統一的なものとして把握することを目的に，18 世紀の前半から 19 世紀を展望する射程の長い思想活動を展開していた西南ドイツの領邦ヴュルテンベルクの敬虔主義神学者 F.Ch. エーティンガー（Oetinger, F.Ch., 1702-1782）に注目し，神学を基礎とした原理論からその実際論としての教育論への発展において，その人間形成論を把握するものである。

（対象と方法）

本研究は，本論が 2 つの基幹部分，さらにそのそれぞれが 2 つの部分に分かれて 2 部 4 章，さらに 2 つの補論と 3 つの付録で構成されている。エーティンガー・人間形成論の思想課題を当代のヴュルテンブルクの民衆教育において位置づけようとする第 1 部の第 1 の部分では，エーティンガーの教育実践論への転回をその活動と思想の展開において確認することを当面の目標に，主として『自伝』の記述を基本としつつも，多くの関連文献を用いてその転機を事実として確認し，そこにおいて明確な教育的関心への転回の事実が把握されている。その第 2 の部分では，当代のヴュルテンベルクの精神的文化的な状況，ことに民衆教育に関する状況が，エーティンガーがやがてそのために腐心することになるカテキズム教授に焦点化されて把握されている。エーティンガー・人間形成論の教育論としての具体化を扱う第 2 部の第 1 の部分では，若きエーティンガーによる最初の大著『再生論』において示された人間形成（Bildung）の基礎的な原理が人間形成論としての自己実現的な契機を獲得する過程が把握される。その第 2 の部分では，第 1 の部分で端緒とされたエーティンガーのカテキズム論ないしはカテキズム教授論の具体的な展開が，まず聖職者たちへの詳細な解説と手引きに始まり，やがて年齢段階を明示し，一般民衆，つまり家父や家母たちと子どもたちとの問答の範例を示す，すぐれて実際的なものへと発展する道筋として明らかにされている。このようなエーティンガーの人間形成論研究において得られた知見と展望に基づいて，最後に新たな Bildung 概念史の通史的な可能性を

展望した見取り図が補論として提示されている。

（結果と考察）

本研究で得られた結果は，まず第１に，ドイツ本国で全集の刊行が進むなど多くの関連研究が存在する神学研究の世界とは対照的に，これまで断片的にしか注目されてこなかったエーティンガーの人間形成論について，その原理論をカテキズム論ないしはカテキズム教授論へと繋げ，全体像をほぼ完全に把握することができたということである。それは，それぞれを代表する著作を選定し，そしてそれらを読解し，さらにその結果を綴り合わせ，教育論への収束という過程において構造化するという作業において達成された。その第２は，このエーティンガーの人間形成論の研究によって，研究の元来の目的でもある Bildung 概念史に新たな観点の導入を可能にし，フンボルトの allgemeine Menschenbildung の概念によって分断されてきた Bildung 概念の通史的な叙述のための試論的なモデルが得られたということである。

審 査 の 結 果 の 要 旨

Bildung 概念の史的再検討を目指して，そのキーパースンとして設定されたエーティンガーの人間形成論についての教育思想史的な評価の確定作業を，古今内外の関連文献・資料の博捜とその丹念な読解と再構成によって達成させた独創的な研究である。その神学の研究とは対照的にきわめて断片的な把握に留まっていたエーティンガーの人間形成論の全体像を明らかにした功績は大きい。そして，この研究が，最新の情報検索システムを活用し，ことに18世紀ドイツ，しかもシュヴァーベンのドイツ語，さらにはラテン語の文献までもドイツ本国から直接取り寄せ，長い時間をかけて根気よく読み解く作業によってはじめて達成されたことを評価したい。また，この研究によって，従来のドイツ教育思想史研究では必ずしも十分ではなかった Bildung 概念史の統一的で連続的な把握への道が切り開かれたともいってもよい。しかしながら，この点については，それがようやくその概念史のモデルを見取り図的に示しえたにすぎず，その発展的な成果は別途改めて期待しなくてはならないが，もちろんこのことが学位請求論文としての本研究の評価を下げるものでは決してない。

よって，著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。